

## 学 習 L 6060

## 幼児における名詞と助数詞の意味的制約

○今井むつみ 内田伸子

(慶應義塾大学) (お茶の水女子大学)

**目的** Markman他多くの研究者により、子どもは語意学習の非常に早い段階から、言葉の意味がどのような原則によって外延決定がなされているかを知っており、その知識を制約として言葉を覚えていく、ということが明らかになってきた。本研究のねらいは、日本語を母国語とする幼児が、名詞の意味外延の原則と、助数詞の意味外延の原則について、どのような知識を持っているかを調査することである。

名詞の意味の外延は同じ概念カテゴリーに属するものとする概念カテゴリーバイアスがMarkman達によって提唱されたが、最近、内田、今井らは知覚次元、特に事物の形状への注目が概念カテゴリーへ移行する前段階として子どもの語意獲得に重要な役割を果たしていることを示した。一方、助数詞の外延決定においても事物の形状、大きさなどの知覚次元は重要な要素となっているが、この場合は、名詞と異なり、事物の特定の形状ではなく、もっと抽象的な形が問題となる。例えば、個、枚、本など頻度の高い助数詞は、立体的な物（3次元）、平面的な物（2次元）、細くて長い物（1次元）といった、事物の次元性が外延決定に重要なポイントとなる。そこで、本研究では幼児が事物の知覚的形の異なる側面、つまり、名詞では特定の形、助数詞では次元性に注目して外延決定ができるかどうかを検討した。また、言語的カテゴリーの外延決定以外で、「同じもの」を決定する際には、子どもがどのような基準を用いているかを調べるために、名詞群、助数詞群、非言語群の3群を比較した。

**被験者** 年中児、年長児併せて38名(M=5:6)。

**材料** 9つの刺激セット。それぞれのセットは標準刺激と選択刺激から構成される。標準刺激は各セット1つで、9セットに渡り、立体的な物、平たい物、細長い物、つまり助数詞カテゴリーで個、枚、個に属するような物がそれぞれ3種類づつ用意された。選択刺激は標準刺激と1. 同一形状・異素材・同次元 2. 異形状・同一素材・同次元 3. 異形状・異素材・次元性のみが同じ 4. 形状・素材・次元性とも異なるフィラーの4種類から成る。

**手続き** 各群とも各セットにつき標準刺激を見せ、次に4つの選択刺激を同時に提示して、該当する物をすべて選択させた。名詞群では標準刺激に与えた名前と同じ名前のもの、助数詞群では同じ助数詞で数えるもの、非言語群は標準刺激と「同じもの」を

全部さがして、と教示した。用いられた名詞と助数詞は「フェップ」などのナンセンス語である。

**結果** 各群の反応パターンを図1に示す。名詞群では、名詞の外延はほとんど同一形状刺激一つに限定して選択されたのに対し、助数詞群では標準と同じ次元の選択刺激3つ（フィラー以外全部）が頻繁に選択された。一試行で選択された事物の数の平均は、名詞群が1.1、助数詞群が2.6、非言語群が1.7で、その差は1%水準で有意であった。3群でもっとも違いが顕著だったのは異なる形状・素材・次元性のみが同じの事物の選択で、名詞群、非言語群ではほとんど選択されなかったのに比べ（9試行中名詞群が平均0.7回、非言語群が1.8回）助数詞群はこの刺激の選択率が非常に高く（6.7回）、3群の差は1%水準で有意であった。このことから、名詞と助数詞の外延カテゴリーは異なる規則に基づく物であり、名詞カテゴリーは特定の形状に基づくが、助数詞カテゴリーは事物の次元性の様な抽象的な「形」に基づく物であることを、幼児が理解していると思われる。さらに、非言語群では同一形状刺激と同素材刺激を同時に選択するが多かったのに比べ、名詞群はほとんどどちらか一方（多くの場合同一形状刺激）に限定された。

**結論** 幼児は、名詞、助数詞の外延決定に重要な抽象的な規則に関する知識を有しており、それを言葉の獲得における制約として用いていると思われる。この知識は言語を介しない「同じ物」のカテゴリーの基準とは区別される物である。

Response Patterns for 3 Conditions

